

〔実践報告〕

初修中国語の発音教育におけるブレンド型授業の実践報告 — 教室外e-learningの実質化をめくって —

A Report on the Practice of Blended Instruction in the Teaching of Chinese
Pronunciation: Enhancing the Effectiveness of e-Learning Beyond the Classroom

許 挺 傑

Xu Tingjie

要旨

ブレンド型授業が有効に機能するためには、受講者全員が教室外e-learningを継続的に行うことが重要であるが、その継続は難しいと指摘されている。本研究では、ブレンド型授業における教室外e-learningの実質化を図るために、期末試験に大きく比重を置いた従来の評価方法を改め、教室外e-learningの取り組みに評価の主軸を置くことで、受講者の教室外e-learningの実施率や発音指導終了後に行われる発音テストの成績にどう影響するかについて分析した。その結果、教室外e-learningの実施率が大きく上がっただけでなく、学生一人当たりの練習量も大きく増加した。さらに、発音指導終了後の発音テストにおいてもさらなる成績向上が見られた。

キーワード：初修中国語、発音教育、ブレンド型授業、e-learning、実質化

1. はじめに

大学の初修中国語の発音教育は、大人数クラスのため、学生一人一人に当てられる時間が限られる、授業時間外で母語話者の発音に触れる機会が少ない、教科書の練習問題が不十分でインプットが足りない等の問題が指摘されている（劉2021）。そうした中で、教室内指導と教室外e-learningを融合させたブレンド型授業（以下、BL授業）は、教育効果の高い学習形態として注目されている。BL授業とは一般的に伝統的な教室での対面授業と、新しい学習形態であるe-learningを融合させ、相互補完的に用い、より高い学習効果を上げようとする試みのことである（宮地編2009）。日本の中国語教育においても、BL授業の実践は多く見られる（趙ほか2012、2013、2014、2018、洪・藤本2012、杉江・三ツ木2015、杉江2017、鈴木2006、2008a、2008b、2017、湯山・篠塚2016、湯山ほか2017、Xu2022、許2022、2023a、2023b等）。BL授業が有効に機能するためには、教室外e-learningを受講者全員が継続的に行うことが重要であるが、その継続は難しいと指摘されている（渡辺2015）。

筆者は2020年度より、大学の初修中国語の発音教育において、教室内指導と教室外e-learning（動画学習・聴解課題・音読課題）を融合させたBL授業を実践してきた。BL

授業は非BL授業と比べ、教室外学習が強化され、発音テストの成績向上において一定の成果は得られたものの、教室外e-learningの実施率に問題を抱えていた（許2022、2023a、2023b）。そこで、2023年度のBL授業では、期末試験に大きく比重を置いてきたこれまでの評価方法を改め、教室外e-learningの実施状況を評価の主軸に据えることにした。具体的には聴解課題と音読課題を複数設置し、積み上げ式の構造にすることで、教室外e-learningの実質化を図った。その結果、教室外e-learningの実施率が高まっただけでなく、発音指導終了後の発音テストにおいてもさらなる成績向上が見られた。

本報告では、筆者が実践しているBL授業の概要を紹介し、2022年度のBL授業と比較しつつ、教室外e-learningに関する学生の実施状況や発音テストの成績等を分析し、実践の成果と課題について報告する。

以下第2節では先行研究と本研究の位置づけについて述べる。第3節では2022年度のBL授業と比較しながら、2023年度のBL授業の概要と特徴を述べる。第4節では結果と考察を述べる。第5節ではまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

2.1 教室外e-learningの実質化をめぐる

BL授業を十分に機能させるためには、教師のコントロールが及びにくい教室外e-learningをすべての受講者が継続的に行う、すなわち教室外e-learningの実質化を図ることが重要である。中国語教育におけるBL授業の実践では、教室外e-learningの実質化に関して、教室外e-learningでの取り組みを一定の割合で成績評価に反映させる手法が一般的である。

例えば、趙ほか（2012）では、学習管理機能を活用し、e-learningを使った実習状況を記録し、その結果を成績に反映させると同時に、さらにe-learningで学習した内容に基づき、次回授業の冒頭で実施する確認テストも成績評価の対象とすることで、継続のための外発的動機付けとするという手法が用いられている。成績評価の詳細は、e-learningと確認テストはそれぞれ30%、期末の口頭発表は40%である。なお、BL授業を実施する以前の成績評価は、期末に行われる口頭発表試験を100%としていたという。

また、総合成績に占める教室外e-learningの成績の割合や操作方法等は異なるものの、趙ほか（2012）以外にも、以下の研究（鈴木2006、2008a、2008b、2017、趙ほか2013、2014、許2022、2023a、2023b）でも似たような評価方法が用いられている。

さらに、教室外e-learningの実施率を上げるために、期末試験を行わない取り組みも見られた。例えば、渡辺（2015）では、次のような試みをしている。授業の冒頭で復習の小テストを行う。小テストは、「1.単語の聞き取り」（4問計20点）、「2.単文の聞き取り」（2問計30点）、「3.単文の中国語訳」（2問計30点）、「4.e宿題の実施状況」（4種類計20点）の合計100点で構成される。2013年度は小テストの平均点を30%、期末試験の得点を70%として成績評価を行ったが、2014年度は「e宿題」の達成率向上のために、期末試験を行わず、小テストの平均点のみで成績評価を行った。その結果、「e宿題」の4つのトレーニングをすべて完了できた受講生の割合は、2013年度と比べ、2014年度は週2コマのクラスでは6%増（65%→71%）、週1コマのクラスでは30%増（68%→98%）という結果であった。

筆者が観察した限りでは、中国語教育におけるBL授業の取り組みにおいて、教室外

e-learningの実質化を図るために、期末試験を行わない取り組みは渡辺（2015）のみであった。

渡辺（2015）の取り組みでは、さらに「中国語ブレンド型学習に関するアンケート」を実施しているが、e-learningの実質化による中国語学習の成績への影響には言及していない。これは、2013年度と2014年度において異なる成績算出の手法が用いられていることが理由だと考えられるが、報告を見る限りでは、実施率を見る「e宿題」の部分は、確かに成績の比較はできないが、教室外の「e宿題」の実施率が上がっているのであれば、教室内で行う「復習小テスト」に何らかの影響があってもおかしくはないはずである。しかし、その点に関する言及は特になかった。教室外e-learningの実施率を上げるために期末試験を行わない取り組みは、これまでにない取り組みで大きなインパクトはあるものの、この手法が学生の中国語学習の成績向上にどのように影響するかに関するデータ分析等があれば、そのインパクトはさらに大きなものとなるであろう。

本研究は、渡辺（2015）に触発され、2023年度のBL授業では、期末試験に大きく比重を置いてきたこれまでの評価方法を改め、教室外e-learningの実施状況を評価の軸に据えることにした。また、その結果、これまでのBL授業と比べ、教室外e-learningの取り組みに見られる変化だけでなく、発音指導終了後に行われる発音小テストの点数に見られる変化も報告する。

3. BL授業の概要と特徴

3.1 2種類のBL授業の概要

この節では、2種類のBL授業の概要と授業スケジュールについて述べる。

【表1】2種類のBL授業の概要とスケジュール

	2022年度（許2023a）	2023年度（本研究）
授業名	中国語 I a（1時限と2時限）	中国語 I a（1時限と2時限）
教科書	『中国語ははじめの一步』（発音部分）＋プリント	『中国語ははじめの一步』（発音部分）＋プリント
学生数	1限29名＋2限30名、計59名	1限43名＋2限40名、計83名
実施時期	2022年度前期、1コマ（90分）	2023年度前期、1コマ（90分）
授業環境	・ 対面授業 ・ 教室のiPad	・ 対面授業 ・ 教室のiPad

スケジュール	1. ガイダンス（対面） 2. 中国語概要と声調（対面） 3. 復習＋基礎母音（対面） 4. 復習＋複母音（対面） 5. 復習＋子音前半（対面） 6. 復習＋子音後半（対面） 7. 復習＋鼻母音（対面） 8. まとめとテスト（対面）	1. ガイダンス（対面） 2. 中国語概要と声調（対面） 3. 復習＋基礎母音（対面） 4. 復習＋複母音（対面） 5. 復習＋子音前半（対面） 6. 復習＋子音後半（対面） 7. 復習＋鼻母音（対面） 8. まとめとテスト（対面）
評価方法 ¹	・ 期末テスト50% ・ 発音テスト20% ・ 課題提出30% ・ 欠席1回マイナス4点	・ 期末テストなし ・ 第2回～7回目「小テスト」 （C-learning、発音各回） 各5%×6回＝30% ・ 第8回「発音テスト」20% ・ 第9回～15回目「小テスト」 （C-learning、第1～3課） 各10%×3回＝30% ・ 課題提出20% ・ 欠席1回マイナス4点
備考	1人の教員が2回、同じ内容	1人の教員が2回、同じ内容

【表1】では、2種類のBL授業の概要とスケジュールについてまとめている。

まず、共通点について確認する。BL授業はどの年度も初学者を対象に開講されたものである。また、【表1】に示すように、授業名、教科書、実施時期、授業環境、スケジュールもすべて同じである。

次に、相違点について述べる。相違点は主に2点である。

1つ目は、受講者数である。2022年度は59名、2023年度は83名である。なお、備考欄に書いている通り、受講者数が多いため、どの年度も学習者を2クラスに分け、教員が同じ内容を2回担当する形で対応している。

2つ目は、評価方法の変更である。【表1】に記載の通り、2022年度は期末テストが50%を占めている。残りの50%は、第8回目に行われる発音テスト（50点満点）が20%、課題提出が30%である。なお、この課題提出の30%は、C-learningを使った課題（第2回～第7回は発音各回のテスト、第9回～第15回は中検準4級を模したもの）や、ロイロノートを使った課題（第2回～第7回は音節表の音読、第8回～第15回は会話や単語の音読、書写、翻訳）等が含まれている。一方、2023年度は、従来行われてきた期末試験を廃止し、第8回目に

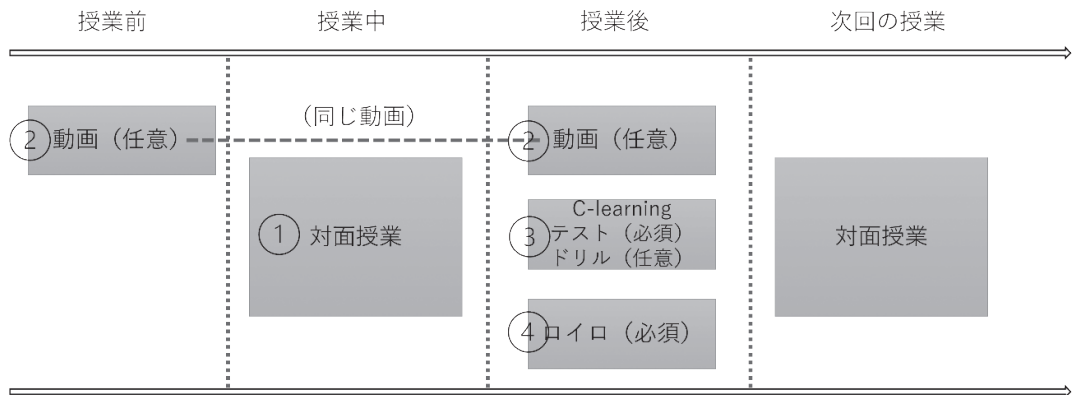
¹「スケジュール」の欄では発音指導の第1回～第8回までの内容のみ記載しているが、「評価方法」の欄では、授業全体の評価方法を記載する必要があるため、第9回～第15回までの評価方法も記載している。

行われる発音テスト（50点満点）の20%は変わらないが、教室外e-learning（第2回～7回目の小テスト（C-learning、発音各回）各5%×6回＝30%と、第9回～15回目の小テスト（C-learning、第1～3課）各10%×3回＝30%）での取り組みに評価の主軸を置くことにし、教室外e-learningの実質化を図った。

3.2 BL授業の構成要素と進行方法

この節では、BL授業の構成要素と進行方法について解説する。

【図1】BL授業の構成要素と進行方法



【図1】では、BL授業の構成要素と進行方法をまとめている。BL授業は、①対面授業、②予習/復習用動画、③C-learningでの聴解課題（テストとドリル）、④ロイロノートでの音読課題の4つから構成されている。以下では、それぞれについて解説する。

まず、①対面授業について述べる。対面授業では主に次のようなことを行う。

- ・挨拶用語の紹介、挨拶用語の発音練習およびペアでの実演練習
- ・学習目標の発音項目の導入および発音特徴の解説
- ・一斉での発音練習と個別での発音練習および発音チェック
- ・学習目標の発音項目に関する聞き取り小テストと解説

対面授業の進行方法について、両年度に大きな変化はない。

次に、②予習/復習用動画について述べる。

動画内容は、授業スケジュール（表1のスケジュールの欄）にそって、その週で学習する内容を解説するものとなっている。基本的に1週間前に学生たちに動画のリンクを公開している。なお、動画のリンクは学生たちが利用している学習支援システムC-learningの教材倉庫に格納している。また、それだけでなく、動画リンクのQRコードを載せた紙の資料も1週間前に配布している。動画視聴は強制ではなく、任意であるが、授業では予習/復習に積極的に利用するように指示している。

なお、動画の内容や学生の利用状況は以下の【表2】に示している通りである。【表2】にあるように、BL授業に用いた予習/復習用動画は全部で7本ある。表の「既読率」と「平均閲覧回数」は、すべてC-learningで記録されている学生のアクセスデータを用いて算出している。表を見ると分かるように、どの年度も既読率の平均は7割程度であり、あまり

差はない。また、平均閲覧回数も2022年度と2023年度でそれぞれ1.49回と1.76回で、大きな差はない。動画閲覧は任意であり、アクセス記録も成績に含まれない中で、授業外でこれだけのアクセスがあったことは、予習/復習用動画は学生の中国語学習にある程度役に立っただろうと推測できる。

【表2】 BL授業に使用した動画の概要と利用状況

		2022年度 (N=59)		2023年度 (N=83)	
動画	長さ	既読率	平均閲覧回数	既読率	平均閲覧回数
声調	28分	66%	1.20	67%	1.52
基礎母音	14分	78%	1.49	68%	1.80
複母音	13分	73%	1.39	68%	1.46
子音前半	32分	58%	1.22	54%	1.06
子音後半	45分	66%	1.00	52%	0.91
鼻母音解説	20分	66%	2.07	89%	2.78
鼻母音練習	34分	66%	2.07	89%	2.78
全体平均	27分	68%	1.49	70%	1.76

次に、③C-learningでの聴解課題について述べる。C-learningを使った聴解課題は、主に2種類である。1つは、解答が必須の「テスト」であり、もう1つは、解答が任意の「ドリル」である。授業スケジュールの第2回～第7回の発音部分はもちろん、第9回～第15回の発音以外の部分（教科書第1課～第3課）もC-learningを活用しているが、本研究は発音教育に焦点を当てているため、ここでは、第2回～第7回の発音部分における「テスト」と「ドリル」のことを紹介する。

【表3】 C-learningでの聴解練習の概要と年度間の相違

		2022年度				2023年度		
内容	聴解課題	T1 (必)	D (任)	T2 (必)	計	D (任)	T (必)	計
声調	1.聞き取り	10	10	10	30	20	20	40
	2.書き取り	10	10	10	30			

基礎 母音	1.聞き取り	10	10	10	30	30	30	60
	2.書き取り	10	10	10	30			
	3.書き取り (+声調)	10	10	10	30			
複 母音	1.聞き取り	10	10	10	30	30	30	60
	2.書き取り	10	10	10	30			
	3.書き取り (+声調)	10	10	10	30			
子音 前半	1.聞き取り	10	10	10	30	30	30	60
	2.書き取り	10	10	10	30			
	3.書き取り (+声調)	10	10	10	30			
子音 後半	1.聞き取り	10	10	10	30	30	30	60
	2.書き取り	10	10	10	30			
	3.書き取り (+声調)	10	10	10	30			
鼻 母音	1.聞き取り	10	10	10	30	30	30	60
	2.書き取り	10	10	10	30			
	3.書き取り (+声調)	10	10	10	30			
合計		170	170	170	510	170	170	340

【表3】では、C-learningでの聴解課題の概要と年度間の相違についてまとめている。まず、表の読み方について説明する。

2022年度のT1、D、T2はそれぞれテスト1、ドリル、テスト2を指す。それぞれ10問の問題が含まれているが、3者の問題構成はすべて同じである。これには問題作成時間の削減と反復練習の促進という意図があった。学生には、テスト1→ドリル→テスト2の順に解答するように指示しているが、テスト1と2は解答が必須でなおかつ1回のみ解答可能である。ドリルは解答が任意でなおかつ解答回数の制限はない。テスト1は授業終了後の翌日まで、テスト2は次回授業開始の2日前までを解答期限とした。ドリルは特に解答期限はなかったが、公開時期はテスト1の終了後である。テスト1とテスト2の点数は成績に含まれるが、ドリルの点数は成績に含まれない。テスト1の結果がよくない場合、テスト2に行く前の練習として同じ問題構成のドリル（出題順はランダム）を積極的に使うように指示した。このように、2022年度は合計510問の聴解問題を用意したが、解答任意のドリルは170問で、解答必須のテストは340問である。

一方、2023年度は聴解問題の中身は特に変わっていないが、C-learningでの操作方法を変更した。例えば、声調を例にすると、2022年度は「1. 声調の聞き取り」と「2. 声調の

書き取り」の問題に関して、それぞれテスト1、ドリル、テスト2のような3種類の練習があるため、声調だけでも、計6種類の練習が存在することになる。そして、この6種類の練習についてそれぞれ公開と終了時間を設定しなければならないため、操作面では非常に煩雑であった。その反省を踏まえ、2023年度は操作面の煩雑さを減らすため、問題の統合を行った。具体的には、2022年度の「1. 声調の聞き取り」と「2. 声調の書き取り」を単純に「声調」にした。さらに、テスト2を削除し、テスト1のみを残した。また、2022年度と同様、テストの点数は成績に含まれるが、ドリルは含まれない。しかし、テストでよい点を取るためには、同じ問題構成のドリル（出題順はランダム）で複数回練習してからテストに取り組んだほうがよいということで、ドリルで複数回練習するように指示した。当然、これも反復練習を促すための措置である。なお、ドリルとテストの公開時期は同じものである。その結果、トータルの問題数は、510問題から340問に減ったものの、操作の利便性は大きく改善された。

上記で述べた変更以外にもう一つ大きな変更があった。それは、教室外e-learningの実質化を図るために、教室外e-learningの取り組みを評価の主軸に据えることであった。

2022年度は、C-learningでの聴解問題（解答が必須のテスト340問）を全部満点で解答した場合でも、その獲得点数は、総合成績の30%を占める課題提出の一部でしかなかった。3.1でも述べたように、この課題提出の30%は、C-learningを使った課題（第2回～第7回は発音各回のテスト、第9回～第15回は中検準4級を模したもの）や、ロイロノートを使った課題（第2回～第7回は音節表の音読、第8回～第15回は会話や単語の音読、書写、翻訳）等が含まれている。一方、2023年度の場合は、1回のテストが全体の5%を占めるため、6回のテストを全て満点で解答した場合、その時点で総合成績の30%を獲得することになる。このように、2022年度と比べ、2023年度では、C-learningでの聴解問題の総合成績に占める割合が大きくなったと言えよう。

上記のような変更が発音指導終了後（第8回目の授業）に行われる発音テストの成績にどう影響するかについては、第4節で詳しく検討する。

最後に、④ロイロノートを使った音読課題について述べる。

ロイロノートはC-learningと同様、授業の履修学生は全員利用可能である。この授業では、発音テストを行う第8回目の授業までに、授業中と授業外で中国語の音節表にあるすべての音節を音読することを一つの目標にしている。授業内では、PPT資料を配布し、その日に勉強する音節を全て音読する。また、授業外でもその日になった音節の音読をしてもらうために、ロイロノートを利用した。具体的には、授業内で利用したPPT資料をPDF資料に変換し、ロイロノートにアップする。その後、教員の音声を読み付け、音声付きの資料を学生に送付する。学生は、各自のデバイスで大学から発行されたIDとPWを入力し、ロイロノートのアプリを開き、音声付きの資料を何度も聞く練習を行った後、自分の音声を吹き付け、期日までに教員に送付する。その後、教員は学生の提出した音声データを聞きながら、気になる発音を指摘し、学生に返却する。写真1（許2023aからの転載）は、ロイロノートを使った音読課題の課題提出画面である。ロイロノートを使った音読課題の内容や操作方法は、2022年度と特に変化はない。

一方、期末試験を廃止し、授業外e-learningの実施状況に評価の主軸を置くことで、C-learningでの聴解課題（テスト）と同様、ロイロノートを使った音読課題も、総合成績

に占める割合が大きくなっていることを指摘しておこう。

【写真1】ロイロノートを使った中国語音声の産出練習の課題提出画面

The screenshot shows the Roylo Note interface for a Chinese pronunciation practice task. The header indicates the course is '中国語 1A (1時間)' and the topic is '鼻母音と子音'. The main area displays a grid of practice items, each with a date and time, a title, and a list of characters. A central pop-up window displays '2022年度 中国語 1A (6) 中国語の鼻母音'.

繰り返しになるが、2022年度は、総合成績に占める課題提出の割合は30%であるが、その30%は、C-learningを使った課題（第2回～第7回は発音各回のテスト、第9回～第15回は中検準4級を模したもの）や、ロイロノートを使った課題（第2回～第7回は音節表の音読、第8回～第15回は会話や単語の音読、書写、翻訳）等が含まれている。一方、2023年度は、総合成績に占める課題提出の割合は20%と減少したものの、課題提出としてカウントされるものは、ロイロノートを使った課題（第2回～第7回は音節表の音読、第8回～第15回は会話や単語の音読、書写、翻訳）のみになっているため、ロイロノートを使った第2回～第7回の音読課題が、総合成績に占める割合は必然的に増すことになる。

このことが学生のロイロノートを使った音読課題の提出率にどう影響するかは次節で詳しく検討する。

4. 結果と考察

4.1 教室外e-learningの実施状況

この節では、期末試験を行わず、教室外e-learningの実施状況に評価の主軸を置くことで、2022年度と比較し、2023年度の教室外e-learningの実施状況がどのように変化したかを分析する。【表4】では両年度の教室外e-learningの実施状況をまとめている。

まず、C-learningを使った聴解課題の実施状況を見よう。

解答が必須のテストの実施率は、2022年度が平均85%、2023年度が平均98%となり、13%増加した。

解答が任意のドリルの実施率は、2022年度が平均27%、2023年度が平均98%となり、71%増加した。

【表4】 教室外e-learningの実施状況

	2022年度実施率（N=59）			2023年度実施率（N=83）		
	C-learning		ロイロ	C-learning		ロイロ
項目	テスト ²	ドリル	音読	テスト	ドリル	音読
声調	94%	38%	実施なし ³	99%	99%	実施なし
基礎母音	80%	23%	実施なし	99%	99%	99%
複母音	88%	23%	85%	96%	96%	99%
子音前半	85%	25%	81%	98%	98%	96%
子音後半	79%	25%	81%	98%	98%	98%
鼻母音	86%	27%	85%	95%	95%	98%
平均	85%	27%	84%	98%	98%	95%

ドリルはテストと異なり、解答が任意であったため、許（2023a）のみならず、許（2022、2023b）でも学生の実施率が低かったという課題があった。これが2023年度では71%増となったのは、やはり教室外e-learningでの取り組みをより評価する仕組みに変更したことが大きな理由であると考えられる。

次に、ロイロノートを使った音読課題の実施状況を見よう。

ロイロノートを使った音読課題は、どの年度も提出が必須であるが、2022年度の実施率は平均84%、2023年度は平均95%となっている。こちらも実施率において11%増加した。この結果は、C-learningでの聴解課題の実施率の増加と同様の理由であると考えられる。

【表4】では教室外e-learningの実施率をまとめているが、以下では、さらにC-learningの聴解課題に焦点を当て、学生一人当たりの練習量について分析する。3.2節ではC-learningでの操作の煩雑さを低減するため、聴解問題の統合を行い、その結果、トータルの問題数は2022年度の510問題から2023年度の340問に減ったことを報告した。では、学生一人当たりの練習量について、年度間に差があるかを見てみよう。

【表5】では、C-learningでの聴解問題の練習量をまとめている。学生一人当たりの練習量は、（テスト実施人数×問題数＋ドリル実施人数×問題数）÷履修者数という式で算出した。

まず、テストの学生一人当たりの練習量を見てみよう。2022年度は、テスト1とテスト2

² 2022年度の授業では、まだテストはテスト1とテスト2のように2回行うことが必須であったため、この実施率はテスト1とテスト2の平均実施率である。

³ 「実施なし」があるのは、履修登録上の事情によるものである。

のように、テストを2回行うことが必須であったが、2023年度では2回行う必要はなかった。そのためか、テストの学生一人当たりの練習量は、どの項目でも、2023年度は2022年度より少ない。特に合計欄を見ると、2023年度は160問であるのに対し、2022年度は288問であり、実に128問もの差がある。

【表5】 C-learningでの聴解問題の練習量

項目	問題数	2022年度 (N=59)			2023年度 (N=83)		
		テスト	ドリル	計	テスト	ドリル	計
声調	20	38	27	65	19	40	59
基礎母音	30	48	11	59	29	62	91
複母音	30	53	9	62	28	45	73
子音前半	30	51	15	66	28	66	94
子音後半	30	47	17	64	28	67	95
鼻母音	30	51	19	70	28	74	102
合計	170	288	98	386	160	354	514

一方、ドリルを見ると、数値は逆転している。どの項目でも、2023年度は2022年度より多い。合計欄を見ると、2023年度は354問であるのに対し、2022年度は98問で、実に256問もの差がある。そして、全体の合計を見ると、2023年度は学生一人当たりの練習量は514問であるのに対し、2022年度は386問であり、両者の差は128問である。

では、なぜこれほどの差が出たのだろうか。

どの年度のBL授業でも、テストは実施が必須で、ドリルは実施が任意である。またC-learningの設定上、テストは1回のみ実施可能であるが、ドリルは実施回数に制限はない。そのため、テストを行う前に、ドリルで複数回練習することは可能である。このことは、成績の一部になるテストを実施する前に、まずはドリルで複数回練習するという動機付けになるが、結果は2022年度より2023年度のほうがドリルの実施量が多かった。ドリルを多くやればテストでよい点数が取れるという仕組みは同じであっても、2022年度と2023年度でドリルの実施問題数に大きな差が出たのは、C-learningにおける各発音項目のテストの点数が総合成績に占める割合の差が大きく影響しているからであろう。各回のテストの点数が総合成績に占める割合が大きければ大きいほど、テストの前段階としてのドリルをより多く行おうという心理は十分に自然であろう。

以上の【表4】と【表5】で見てきたように、期末試験を行わず、教室外e-learningの実施状況に評価の主軸を置くことで、2022年度と比べ、2023年度は教室外e-learningの実施率が上がっただけでなく、学生一人当たりの練習量も大きく増加した。この結果は、渡辺(2015)の結果を支持するものであると言えよう。では、このことは発音指導終了後に行われる発音テストの成績にどのように影響するのだろうか。これについては次の節で分析する。

4.2 発音テストの成績の比較

4.1節では、教室外e-learningの実施率や学生一人当たりの練習量の差について分析したが、この節では、第8回に行われる発音テストの成績の比較を行う。

発音テストは、年度間で比較できるように、どの年度も同じものを使用している。また、実施時期も同様で、いずれも授業スケジュールの「8. まとめとテスト」の回に教室で実施している。第8回目の授業では、まずこれまで第2回～第7回で学習した内容を復習し、その後、発音テストを実施した。問題用紙を配り、教員の音声（どの問題も3回読む）を聞き、その場で問題用紙に答えを書き込む。結果の集計は、事前に準備したC-learningのテストフォームに記載させる形で行った。

発音テストの内容は【表6】に示す通りである。問題1と2は、それぞれ母音と子音の2択の聞き取り問題である。問題3、4、5はそれぞれ声調、子音、母音の書き取り問題である。問題数はいずれも10問で合計50問である。1問につき1点で、50点満点である。なお、この発音テストの成績は全体成績の20%を占める。これは2022年度も2023年度も同様である。

【表6】 発音テストの構成と例題

1. 発音を聞いて、読まれた母音に○をつけてください。	問題1) .a o
2. 発音を聞いて、読まれた子音に○をつけてください。	問題1) .f h
3. 発音を聞いて、声調符号を正しくつけて下さい。	問題1) .cha 問題6) ⁴ .a yi
4. 発音を聞いて、子音を書き取ってください。	問題1) . () uo
5. 発音を聞いて、母音を書き取ってください。	問題1) .m ()

以下では、両年度のBL授業における発音テストの成績の比較を行う。

【表7】 発音テストの成績比較

	2022年度 (N=55 ⁵)		2023年度 (N=83)		t
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
0. 全体	41.05	4.27	41.1	4.82	t (124) = 0.0635
1. 母音の聞き取り	8.64	0.9	8.84	0.94	t (118) = 1.2468
2. 子音の聞き取り	8.78	1.17	8.46	1.49	t (131) = 1.3973
3. 声調の書き取り	9.29	0.93	9.27	1.12	t (129) = 0.1131
4. 子音の書き取り	7.71	1.61	7.37	1.77	t (122) = 1.156
5. 母音の書き取り	6.64	1.39	7.16	1.59	t (125) = 2.0141*
注：*p<.05, **p<.01					

⁴ 問題6) からは、2文字の問題となるため、声調符号をそれぞれ正しく付ける必要がある。ただし、点数は問題1)～5)と同じく、1点とした。

⁵ 発音テストの回を欠席した学生もいるため、この表の人数はこれまでの表の人数と異なる。

発音テストについて、テスト全体および各発音項目別の平均値の差を有意水準5%で両側検定のt検定（Welch's t-Test）を用いて検討した。その結果は【表7】の通りである。「0. 全体」「1. 母音の聞き取り」「2. 子音の聞き取り」「3. 声調の書き取り」「4. 子音の書き取り」の5項目において有意差は見られなかった。一方、「5. 母音の書き取り」では、有意差が見られ、2022年度の平均より2023年度の平均のほうが有意に高いことが分かった。

「0. 全体」「1. 母音の聞き取り」「2. 子音の聞き取り」「3. 声調の書き取り」において、有意差が見られなかったのは、もともと2022年度の当該項目の点数（すべて8割以上取れている）が高く、それをさらに高くするのはやはり難しかったからだろうと思われる。

また、「4. 子音の書き取り」と「5. 母音の書き取り」は、「1. 母音の聞き取り」「2. 子音の聞き取り」「3. 声調の書き取り」と比べ、難易度そのものが高い。実際、2022年度は「4. 子音の書き取り」と「5. 母音の書き取り」の平均がそれぞれ7点台と6点台であったのに対し、「1. 母音の聞き取り」「2. 子音の聞き取り」「3. 声調の書き取り」の平均はそれぞれ8点台、8点台、9点台であった。このことは、2023年度でもあまり変わらなかったが、唯一「5. 母音の書き取り」のみ、平均が2022年度の6点台から7点台に上がった。

本研究の第1節で述べたように、筆者は2020年度より大学の初修中国語の発音教育にBL授業を導入し始めたが、「5. 母音の書き取り」の平均得点が7点台になったことはこれまで一度もなかった。実際、2020年度は4.54点、2021年度は6.57点、2022年度は6.64点であった。また、許（2023a）では、「5. 母音の書き取り」について次のように述べている。

最後に「問題5」母音の聞き取りであるが、2021年度と2022年度の平均得点がそれぞれ6.57と6.64である。2021年度より2022年度は、平均点は上昇したものの、有意差はなく、また依然として6点台にとどまっている。2021年度のBL授業を発展させる形で、2022年度のBL授業を実施したが、「問題5」母音の書き取りの得点の低さという問題は満足できる改善には至らなかった（p.69）。

これが2023年度になり、初めて7点台の成績を記録した。許（2023a）で達成できなかったことをある程度前進させることができたと考えてよいだろう。これは、2023年度のBL授業に新たに取り入れた工夫が功を奏したと考えられる。

期末試験に大きく比重を置いた評価方法を改め、その代わりに、教室外e-learningでの実施状況に評価の主軸を置くことで、C-learningを使った聴解問題とロイロノートを使った音読練習の実施率【表4】が大きく上がっただけでなく、それに伴い、学生一人当たりの練習量【表5】も大きく増加したことが観察された。これらの結果が【表7】に見られる「5. 母音の書き取り」の得点の有意な上昇につながったと考えることが可能であろう。

5. まとめと今後の課題

筆者は2020年度より、大学の初修中国語の発音教育において、教室内指導と教室外e-learning（動画学習・聴解課題・音読課題）を融合させたBL授業を実践してきたが、教室外e-learningの課題提出率に問題を抱えていた（許2022、2023a、2023b）。そこで、2023年度は、渡辺（2015）にならい、教室外e-learningの実施率を上げるために、期末試験を行わないことにした。それにともない、期末試験に比重を置いた従来の評価方法を改め、

教室外e-learningの実施状況に評価の主軸を置くことにした。

その結果、渡辺（2015）と同様、教室外e-learningの実施率が大幅に上がり、それにもない、学生一人当たりの練習量も大きく増加した（4.1節）。このことから、評価方法の変更による教室外e-learningの実質化は、教室外e-learningの実施率の増加に大きく貢献できることが明らかになった。

また、渡辺（2015）には特に言及がなかった成績の変化については、本研究の4.2節で分析したように、評価方法の変更による教室外e-learningの実質化は、成績のさらなる向上にも貢献できた。特にこれまで懸案であった「5.母音の書き取り」の平均得点が6点台を突破し、7点台になったことは大きな成果であったと言えよう。

一方、課題として次のようなものが残されている。

1つは、発音テストの「5. 母音の書き取り」は、7点台になったものの、「4. 子音の書き取り」と同様、まだ8点台には達していないため、今後は、2023年度の取り組みを踏まえ、さらなる対策を検討していく必要がある。

もう1つは、2023年度のBL授業も、許（2023a）と同じく、学生の中国語音声の知覚能力に焦点を当てているため、BL授業の取り組みが学生の中国語音声の産出能力にどう影響するかは不明である。これも今後の課題としたい。

参考文献

- ・伊景春・竹島毅2012.『《最新2訂版》中国語ははじめの一步』東京:白水社
- ・許挺傑2022.中国語の発音指導期におけるブレンド型授業の実践報告—中国語音声の知覚能力への影響を中心に—,『中国語教育』20:73-93頁。
- ・許挺傑2023a.初修中国語の発音教育におけるブレンド型の実践報告—2種類のブレンド型授業の比較を中心に—,『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』60:57-72頁。
- ・許挺傑2023b.初修中国語の発音指導におけるブレンド型授業の実践報告—非言語系学科を対象に—,『日本文理大学紀要』51（1）:119-124頁。
- ・洪潔清・藤本茂雄2012.千葉大学中国語教育におけるMoodleの活用,『言語文化論叢』6:101-115頁。
- ・杉江聡子・三ツ木真実2015.遠隔交流を活用した中国語ブレンディッド・ラーニングの実践と混合研究方による評価,『教育システム情報学会誌』32（2）:160-170頁。
- ・杉江聡子2017.日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探究,『中国語教育』15:105-123頁。
- ・鈴木靖2006.中国語のブレンド型学習導入のための学習管理について,『日本中国語学会第56回全国大会予稿集』142-146頁。
- ・鈴木靖2008a.教員の技術的負担を増やすことなく中国語のブレンド型学習を実現するには—授業同期型eラーニングeHomework!の開発と中国語教育への導入—,『日本中国語学会第58回全国大会予稿集』40-43頁。
- ・鈴木靖2008b.ブレンド型学習による授業外学習の強化とその効果について,『論文誌IT活用教育方法研究』11（1）:11-15頁。
- ・鈴木靖2017.学生のやる気を引き出すブレンド型学習,『中国言語文化学研究』6:19-27頁。
- ・趙秀敏・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大2012.第二外国語としての中

国語学習のためのブレンディッドラーニングの開発と実践,『教育システム情報学会誌』29(1):49-62頁。

- ・趙秀敏・富田昇・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大2013.非語学系学科を対象とした第二外国語としての中国語学習における3段階ブレンディッドラーニングの実践,『教育システム情報学会誌』30(4):237-242頁。
- ・趙秀敏・富田昇・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一・三石大2014.第二外国語としての中国語学習のためのブレンディッドラーニングにおけるeラーニング教材設計指針の作成と実践,『教育システム情報学会誌』31(1):132-146頁。
- ・趙秀敏・張立波・上野稔弘・今野文子・三石大2018.東北大学初修中国語におけるブレンディッドラーニングの実践—開発した教科書『KOTOTOMO』の検証を中心に—,『東北大学高等教養教育・学生支援機構紀要』4:149-163頁。
- ・宮地功編2009.『eラーニングからブレンディッドラーニングへ』東京:共立出版
- ・湯山トミ子・篠塚麻衣子2016.初修中国語教育における反転授業の試み—ICT活用型教育“遊”における実践事例—,『コンピュータ&エデュケーション』40:73-78頁。
- ・湯山トミ子・篠塚麻衣子・謝恵貞2017.初級中国語における遠隔交流の試み—反転授業導入による初修外国語教育の新展開—,『2017年度PCカンファレンス報告論文集』91-94頁。
- ・劉羈2021.中国語発音教育における知覚訓練の効果について—声調,母音,子音を中心に—『中国語教育』19:15-35頁。
- ・渡辺昭太2015.初級中国語授業へのブレンド型学習の導入とその成果,『法政大学教育研究』6:33-47頁。
- ・Xu,TingJie. 2022, A Comparative Study of Blended Learning and Face-to-Face Instruction in University-Level Chinese Language Education. Inter Faculty. 11:261-267.

付記 本稿は「e-Learning教育学会第22回研究大会」(2024年3月16日オンライン実施)で口頭発表したものに加筆修正を加えたものである。発表の際に承った多くのご意見ご指摘に対し、この場を借りて深くお礼申し上げる。

